

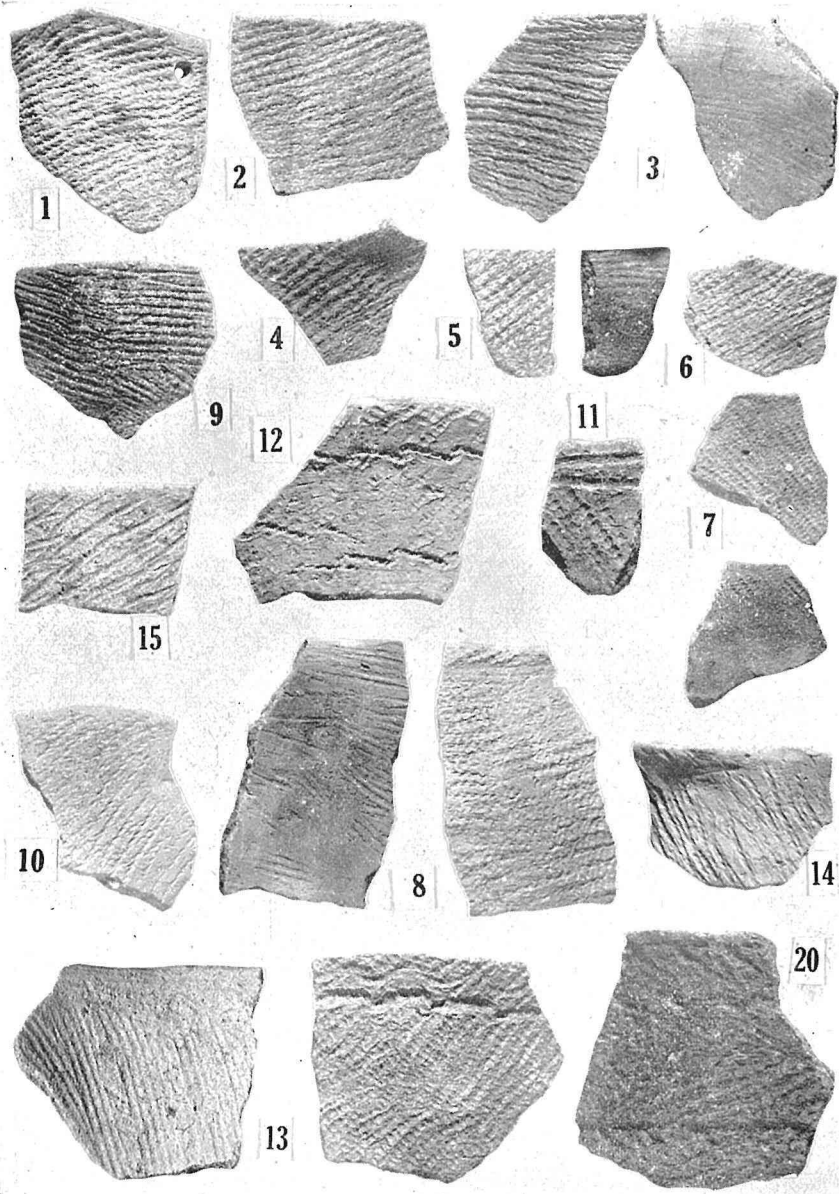
羽後角間崎遺跡の土器

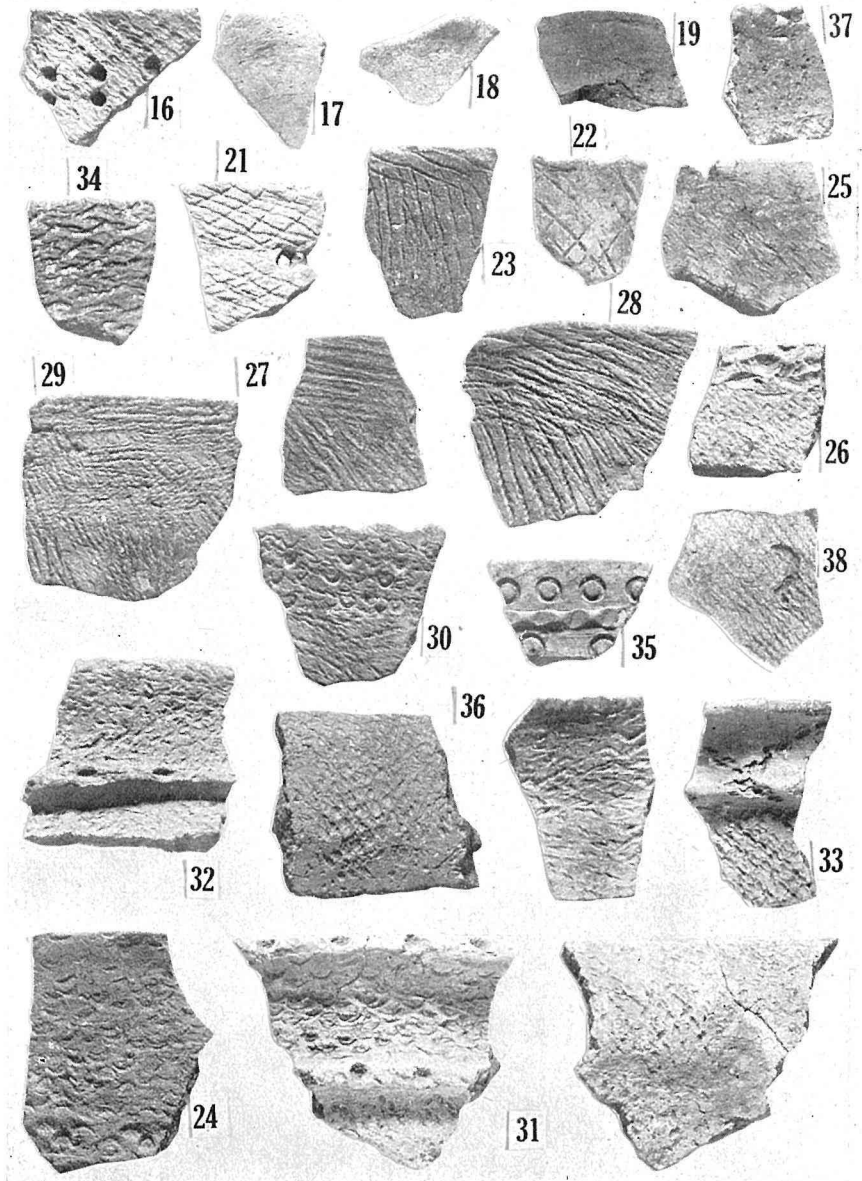
角 田 文 衛

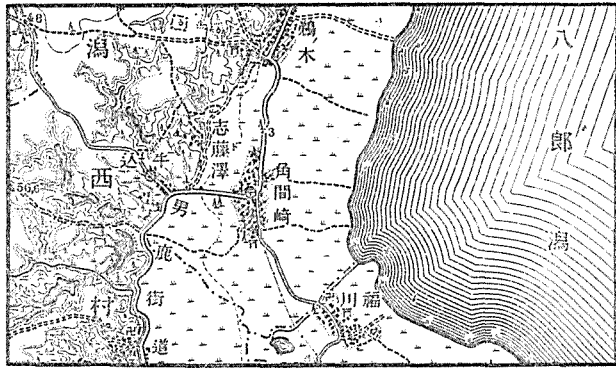
男鹿半島の寒風山を中核とし、其の周圍に發達した洪積臺地には石器時代の遺跡が頗る多いが、こゝに述べやうとする南秋田郡潟西村角間崎字岡見澤の遺跡は其等のうちで最も注目すべきものである。脇本から八郎潟の西岸に沿うて北上する男鹿街道は、角間崎に於いて北浦街道を分岐してゐる。この分岐點から三町ほど西北へ進るとや、坂路となつて洪積臺地に達するが、この道路に面した左右の臺地の縁邊に當遺跡が存するのである。即ち第一圖に○を以つて示したのは右の切通しであつて、遺跡は切通しの左右にある譯である。

さて本遺跡が初めて發見されたのは、明治二十六年八

月、北浦街道を改修する爲に臺地の斜面を崩した時であつて、當時の目撃者の談に據れば、現在道路敷地となつてゐる部分にも貝塚が在り、多くの遺物を出土したと言ふ。向つて左、即ち道路より西南の臺地は平坦で、面積二反歩ほどあり、いまは忠魂碑が建てられてゐるが、この臺地上にも少しく土器の散布をみ、特に其の東南の縁邊には遺物が尠からず露頭してゐるのが見受けられる。けれども該地點は遺跡の中心ではなく、中心たる住居址は北浦街道上に在つたものと推測される。次に向つて右の臺地は切通しのために左の臺地より切斷され、ために舌狀に東へ伸びた細長い形となつてゐるが、この臺地の西北端即ち切通しの北側に貝塚が形成され、臺地の背面の急斜面には遺物包含層が存してゐるのである。大正十







第一圖 角間崎遺跡附近地形圖（五萬分之一）

貝墟は殆ど残骸を呈する許りであつた。現在、貝墟は全く壊滅した許りでなく、臺地の背面にある遺物包含層も用水池の堤を造る土を採取するため、過半は破壊されて

羽後角間崎遺跡の土器（角田）

年の秋、武藤一郎氏が調査に赴かれた。貝墟は僅かに道路に沿つて七尺、斜

面に沿うて七尺、即ち約一坪餘の面積を有するに過ぎなかつたが大正十四年の初秋、小牧實繁教授が調査されたときは、

るる有様である。ともかく本遺跡は北浦街道によつて二分されてはゐるが、元來臺地のや、平坦な縁邊に營まれた一つの住居址であることは疑ひないのである。遺跡の廣袤が大きく、且つ遺物の豊富なことは、聚落の規模の大なるに依るといふよりも、居住年月の長さに歸すべきであらう。

私は小牧博士が京都帝國大學考古學教室に將來された材料によつて始めて本遺跡の重要性を覺知し、昭和十一年、陸前船入島遺跡を論じた際、石器時代の初期文化の研究上、没却し得ざること説いた譯であつた。さいはひ本年四月下旬、村當局の好意により、三日に亙つて當遺跡を調査し、年來の希望を實現したことは、私にとつて洵にこよない欣びであつた。

私の調査したのは辛くも廢滅を免れてゐる切通し右手の臺地背面の急傾斜面で、その面する澤地から頂上までは約六十尺の高さがあり、また其の傾斜は四十五度餘もある（この地點は村有地で、地番は岡見澤五十番、三番、八十六番の三と二口になつてゐる）。第二圖は澤地から眺めた傾斜面であつて、中央の崩壞狀を呈した處

第二十四卷 第三號 一三一

は即ち土砂採取の跡である。私は初めこの採取のため出
來た遺物包含層の断面を調べ、然る後、中腹に東西二間、
斜面に沿うて一間の發掘溝を穿ち、出土状態を調査した。



第二圖 傾斜面と發掘地點

第二圖
は傾斜
面に於
ける發
掘部位
を示し
てゐる
が、急
傾斜の
ため頗
る發掘
が遅延
し、あ
まつさ
へ包含

層が深いため完了までに三日を要したのであつた。包含
層の深さは斜面の故に部分によつて一様でない。いま上
位の東西邊の中央で計ると、地表から八寸までは黑色の
表土で、土器を全く包含してゐない。三尺二寸までは土
器の多い黒褐色土層であつて、就中、二尺六寸から三尺
二寸までは發掘困難なほど夥しい土器が包まれてゐるの
である。これを上層とし、次の六尺二寸までの粘土質褐
色土層を下層とした。土器は上半に多いが、なほ地盤に
達するまで少からず存する。土質は浸潤な上に緻密で固
く、土器破片の採取は容易ではない。下層は西南の方が
深く、西南隅では地表下八尺五寸で終つてゐる。この下
層の下は褐色の均質砂層であつて、本臺地の基盤を構成
するものに外ならぬのである。而して以上の發掘によつ
て得た土器は林箱八個に達する豊富さであつた。本遺
跡に就いては初め武藤氏が調査報告を公にされ、ついで
小牧博士は地理學的見地からする精細な研究を本誌に發
表されてゐる具類よりする當代生活の復原とか石器の考
察といつた項目は全部此等の文獻に盡されてゐるから、

私は其の際えた土器に基づいてのみ管見を披瀝することゝしたのである。

二

絨上の如くに得た夥しい土器破片はこれをやゝ仔細に檢すると、二群に大別し、六類に細別することが出来るのである。第一群は出土数の九割九分以上を占め、纖維の豊富な含有を以つて其の標識となしうるものである。大部分黒褐色を呈し、質は脆弱、粗鬆に傾くが、此れは幾分、濕潤で壓縮されたやうに固い層中に包含されてゐたことにも基づくであらう。器壁内に多量の纖維が挿入され、或破片では内面が頭髮のもつれのやうな様子を呈してゐる。厚さは二、三分で、器の大きさは小形か或ひは中形である。器形は深鉢形が大部分を占め、中に少しく圓筒形をなすものも見受けられる。口縁はおほむね直立するも、また多少は外反する例も存してゐる。底部には平底と上底（フタ）とがあり、尖底は一個だけ見受けられた。底面の大きさは直徑二、三寸であり、大形のものとも雖も

四寸を越えることはない。總数の三分之二が上底であることも注意されよう。次に接底部には體部と同様な斜行繩文、稀には繩捺文を施した例も少くない。接底部の大部分は下腹部に連つて一直線に底部に聯結することなく、いづれも多少とも外翻してをり、此れが第一群の顯著な特色をなしてゐる。底部内面に文様が施されることはないが、たゞ一例だけこゝに條痕を印するものが存した。底面に斜行繩文を施した例も多少見受けられる。一例では網目狀捺系文が下腹部で終了し、それに引き續いて接底部と底面に斜行繩文を印してゐた。次に唯一片ではあるが、尖底の破片がある。これは多量に纖維を含み、乳嘴狀ではない、普通の尖底をなしてゐる。

先づ第一類は斜行繩文を文様の主要素とする、中形・薄手の土器であつて、全部深鉢形をとるものである（1—16）。器壁内に多量の纖維を含み、また少からず砂粒の混入が認められる。口縁は多く直立するも、10・12・13のやうに少しく外反する例も見受けられる。1の如く波狀口縁をなすことは甚だ稀であつて、多くは4・6のやう

な三角形突起の口縁をとつてゐるのである。口端は大部分、素文であるが、其處に斜行繩文、もしくは小刻み乃至圓點を施した例も少くはない。そして7に見るやうに斜行繩文が内面へまで及んでゐる場合もあるのである。口端のや、平いものも存するが、普通に言ふ平縁は至つて少い。文様としては複節斜行繩文が全く壓倒的であつて、左傾・右傾ともにあるけれども、右傾の方が幾分優勢である。而して繩文は繩目で、横位に施文されてゐる。また9・10・12・14の如き單節斜行繩文や15のやうな無節斜行繩文も若干存するが、特に後者は稀有である。14の如きは同じく單節斜行繩文と言つても、燃系文的手法が顯著である。なほ裝飾文を有するものも亦、少量出土した。即ち11は口縁に沿つて平行する二沈線を廻らしたものの、12・13は小波狀に繩捺文を廻らしたものである。16の如く、上下に並ぶ孔の列を頸部に廻らした手法は洵に珍稀なものと言はねばならない。次に本類の著しい特徴は其等のうちの若干の内面に條痕を有することである。3の如く斜めのもの、5の如く横位のもの、13のや

うに口端が横位で、其れ以下が斜位のもの、8の如く不規則のもの等がある。而して上述したやうに、此等條痕の或ものは底部内面にまで施されたのである。條痕をもつ土器破片の出土状態を調べると、下層に於いてずつと優勢であることが看取されるのである。

第二類は素文の土器で、孰れも小形・薄手にして、纖維の含有は中量である(17・19・25)。主として上層から少量出土した。18は山形波狀縁であつて、其の頂點にや、深い孔が穿たれてゐる。口縁は直立か、或ひは軽く外反してゐる。25のやうに幽かに不整燃系文の印されたものもあり、また簡單な沈線文を施した例も存してゐる。

第三類は燃系文系の地文を有する、中形の土器である(21・23)。此れまた主として上層から少量發見された。

口縁は殆ど直立し、口端に小刻みのあるもの(22)や繩捺文の印されたもの(21)等がある。そして21では燃系文の餘勢は少しく内面へまで及んでゐる。文様は21・22のやうな網目狀、23のやうな不規則の燃系文から構成され、共に單節である。

第四類は頸部に裝飾文様帯を有する一群で、大きさは前三者に比してやゝ大きいが、其れでも中形の範圍を出るものではない(20・26—30)。本類は量的に言へば第一類に次いで發見される(但し總數は遙かに劣る)。口縁は直立するか、多少外反してゐる。口縁に小刻みあるもの(30)や繩捺文を印するものも見出されるが、三角形乃至山形の突起は全く認めることが出來ない。おほよそ幅一寸の裝飾文様帯に横位に不整捺糸文を印し、其れに續いて不整捺糸文や單節斜行繩文を施すのが特色であつて、29では兩者の交錯が看取されるのである。30は本遺跡の最も特徴とする竹管亂捺文を以つて頸部を飾つてをり、また20は體部を羽狀繩文で充てゝゐるが、此れは本遺跡に見られる唯一の帶狀繩文である。而して第四類には内面の條痕や繩文は絶えて求めることが出來ないのである。

第五類は頸部に横走する隆起帯を以つて裝飾文様帯の下限を劃した一群であつて、器の大きさはやゝ大形である(31—33)。兩層に亙つて少數出土するが、層位による

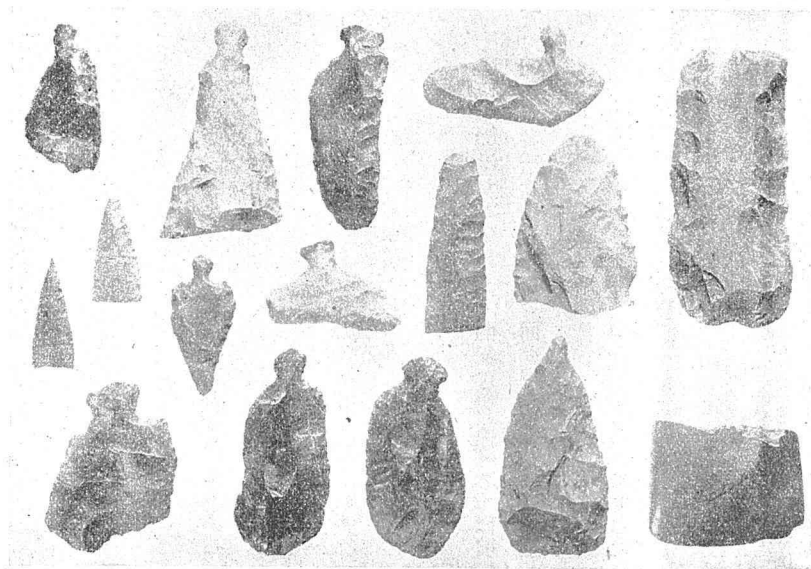
變化は指摘しえない。口縁は多少とも外反するを恒とし、口端には31に見るやうに孔を等間隔に穿つことが多い。また口端には往々繩文も施されてゐる。頸部文様をなすのは不整捺糸文(32)、竹管亂捺文(31)等であるが、また33の如く一條の繩捺文を鋸齒狀に廻らすこともある。頸部隆起帯には一般に施文される。即ち繩捺文で刻みをつたり、或ひは口端に見るやうに孔を並べてゐる。次に注目すべきことは、本類にのみ見られる内面に施された不整捺糸文であつて、本類土器の過半数に認めうるのである。

——以上のほか24の如く全面を竹管亂捺文や條痕で充てた破片が各一片出土した。而して此等には共に幽かな條痕が内面に認められた。

第二群に屬する土器は上層から十片ほど出土したに過ぎない(34—38)。黝褐色を帯び、やはり薄手中形の深鉢をなす。質はやゝ脆弱であるが、蓋し此れは第一群土器と同様保存に依るであらう。而して器壁内に纖維を含まず、かつ質は脆弱なるを別とすれば緻密な分子から構成され

てゐる。口縁は概して外反し、口端には34の様に小刻みがあるが、其れは口端の外側に傾つてゐる點に大きな特色がある。文様は殆ど頸部に集中されてゐる。例へば34は不整捺糸文を印してゐるし、35は頸部に連續的壓痕を有する紐狀隆起線を廻らし、其れに平行して上下に竹管文の列を加へた珍しい手法である。37は素文土器の口端及び口縁に隆起線を貼りつけたものである。また38は複節斜行繩文の施された腹部破片であるが、隆起線の斷片が貼りつけられてゐて興味深い。以上の第二群土器は第一群に比して九牛の一毛に過ぎないから、其れは混入とは言へぬにしても、一應異質的なものと思惟されるのである。

本遺跡からは豊富に石器が出土した。其の主要なものは第三圖に掲示したとほりであるが、先づ石斧は三個とも美麗な綠泥岩製で、蛤刃を示してゐる。圖の如き定角式のものゝ外に、末端のやゝ尖つた遠州式風のものも見受けられる。また第三圖右上の示す打石器は短冊形石斧のやうであるが、併し石筥の一種と目すべきものであら



第三圖 角間崎遺跡發見の石器

うか。かゝる石筥は石槍の類と共に各數個發見された。石匙は相當數發見されたが、其の石質は石筥や石槍と同じく石英粗面岩・輝石安山岩等である。圖示する如く縦型が壓倒的で、横型は十九個中三個に過ぎぬのである。石鏃はいづれも細長い二等邊三角形を呈してゐる。中にはやゝ大きい、又は二邊に荒くつけられてゐるものも見受られる。次に本遺跡の石器中最も特色あるのは扁平楕圓形の長徑三寸内外の河原石の相對する兩端を打缺いて製作した錘石様の石器である。これは無慮八十個ほど採集しえたが、其の用途は一概に錘石とのみ斷定出来ぬのである。

三

角間崎遺跡の情況と遺物はおほよそ紋上の如きものであるが、次に右の遺物の性質に關し聊か所見を述べると、したい。先づ第一群土器の各類はたとひ出土状態に多少の相違をみるにしても、いづれも同一様式の遺物たることは容易に認めえよう。かくして私達は第一群に最

も近い陸奥榎林遺跡D地點を基準とする赤川式土器を想起せねばならぬ。いま兩者の相似點を掲げると、(一)第一群の五類は多かれ少かれ赤川式に見出されること、(二)纖維を多量に含むこと等が歸結される。けれども兩者の相違點も亦少くはない。先づ第一類に關しては、赤川式には内面に條痕なく、また口縁内面に繩文が施されない。赤川式の斜行繩文は大部分單節であり、且つ羽狀繩文が見られる。更に赤川式には突起が見られない。次に第三類に關しては21・22の如く地文として擦糸文を有するものはなく、辛うじて23の如き不整擦糸文があるに過ぎないのである。第四類に就いては赤川式はずつと發達してをり、裝飾としての意圖が濃い。頸部の裝飾文樣帶に於ける繩捺文、沈線文、網目狀擦糸文等の發達は目ざましいものがあると共に、また竹管亂捺文の如き風變りな手法には遭遇することが出来ないのである。第五類に關しては赤川式ではよく發達し、出土數量も夥しい。特に頸部文樣帶の構成は變化に富むが、第五類に見る如き内面の施文は絶對に見られない。なほ赤川式の石斧・

石匙は第一群の其れと全く同一であることを附言しておく。

次に此れを陸前・羽前文化圏に於ける類似土器に比較するに、船入島下層式は第一類と内面に條痕のある點や口端に小刻みのある點で近いが、第一類が複節斜行繩文を主とし、殆ど條痕による表面文様をもたず、三角形突起縁を有する點ではかなりの逕庭を示してゐる。この三角形突起は北海道の住古式に通ずるものがあり、また口端の斜行繩文は陸前の浦口式に見るところである。次いで船入島上層式との關係を見ると、第三類等に於いてや、相似たものゝ存する外は殆ど異質的である。たゞ上層式の底部は其の外翻する形が全く第一群の其れと同一であることは注意に値するであらう。

かやうに考察を進めると、第一群土器は東北の古式繩文土器の諸型式と多少の出入はあつても相近いものがありこの點からしても陸奥に於いて赤川式と並び稱される古式土器たることは容認されねばならぬ。然るに赤川式と對比すると既述の如く赤川式の中心をなす第四類、第

五類が第一群では未發達であり、赤川式では衰微を示す第一類が第一群では最も優勢で、斜行繩文も復雜し、かつ内面文様すら施されてゐる。同じ第一類でも下層出土のものには内面に條痕を有するものゝ多い事實は、第一群第一類から赤川式への推移を物語るものではなからうか。即ち第一群土器乃至は赤川式土器は並行發達せる若干の型式を包む一つの様式と觀せられるのであつて、兩遺跡が同一文化圏に存する事實から勘校しても第一群が赤川式の直前に位する様式であることが言へるのでないかと思ふのである。私達は陸奥・羽後文化圏の古式土器を追求してこの第一群土器——爾後この土器と石器に示現された生活様式に角間崎式の名稱を冠することゝしたいが——にまで達したが、なほ第一群土器には分析しえない諸要素が含まれてゐるのである。例へば尖底や條痕の出自の如き、或ひは各型式に分化せることの事由の如き、更には發達せる複節斜行繩文の問題の如きである。今日、私達の調査は遺憾ながら此等の問題に満足な解答を與へえないのである。たゞ私は陸奥地方に於いてか、

る古式土器の遺跡を若干発見してゐるから、如上の諸問題の解決も不可能とは考へないのである。

然らば第二群土器の占める位置は如何。その出土數量の僅少ななるため、目下これを一舉に解決することは困難であらう。口端外側の小刻みや竹管文の刻は浦口式にも認めうる處であるが、兩者は全く質を異にしてゐる。寧ろ比定さるべきは私が船入島第四類(イ)として區別した一群の土器であつて、貼りつけたやうな口端の隆起線文は彼我相通するものがあるし、且つは兩者は厚手系土器の祖形として全く纖維を包含しないのである。然るに陸奥文化圏に於ける圓筒系文化の發達過程に於いては、既に私が『榎林遺跡の研究』に於いて敘説したやうにかゝる

土器型式は生成される餘地がないのである。従つて第二群土器は或時期に隣接せる陸前羽前文化圏より流入せるものと看做さねばならぬのである。この意味に於いて角間崎遺跡は第一群土器から形成された、今日遡りうる限り最古の石器時代遺跡であると歸結されるであらう。

参 考 文 献

- (一) 武藤一郎氏『羽後國男鹿半島角間崎貝塚研究報告』(人類學雜誌第三十七卷第一、二、三號)。大正十一年三月
- (二) 小牧博士『日本海沿岸石器時代遺跡の地理學的考察』(二)『史林第十一卷第二號』。大正十五年四月
- (三) 拙稿『陸前船入島貝塚の研究』(考古學論叢第三輯) 昭和十一年十月
- (四) 拙稿『陸奥榎林遺跡の研究』(考古學論叢第十輯) 昭和十四年一月